

橋本瀬那、田村萌実

## 災害時における流言の発生と拡散の実態

～関東大震災と能登半島地震の比較研究～

### 要約

本研究では、災害時に広がる流言をテーマとして、関東大震災と能登半島地震の時にいずれも広がった流言の実態を比較し、時代による流言の特徴や発信・拡散・収束の時代よる変化を研究した。二つの震災における与えた影響は能登半島地震のほうが関東大震災の時よりも少ない」という仮説を立てた。

両災害における情報の流布に関する特徴は、共通点として、災害発生直後の情報不足と人々の不安により、不確かな情報でも拡散する人々の心理状態が浮かび上がった。両災害時に拡散された流言は、人々の不安を煽るような内容が多くみられた。相違点としては、情報環境や情報の発信・収束速度、流言による社会的影響が挙げられた。

災害時には情報不足や混乱状態が生じ、人々は一時的に冷静な判断を欠きやすく、手近な情報が精神的な支えとなる傾向がある。こうした状況下では流言の拡散が心理的な安定をもたらす側面がある。さらに、善意や義務感が、情報の信憑性を確認する前に情報を共有する行動につながりやすく、特に災害時には人々の間で迅速に広まっていく。このような心理的要因は関東大震災から現在に至るまで共通して認められるものであり、流言の発生が抑制されにくい一因と考えられる。

関東大震災発生時は新聞や電話のメディアのみであり情報不足の時代であった。調査結果として、不安感や恐怖などの感情が流言を増加させ、社会に影響を及ぼすほどの朝鮮人虐殺につながったことがわかった。一方で、能登半島地震発生時は SNS やメディアが発達し、特に X (旧 Twitter) を中心に広まったが、悪質な虚偽の情報の発信を諫める政府の呼びかけや自主的な誤情報の訂正により早めに収束し、「私たちに与えた影響は能登半島地震のほうが関東大震災の時よりも少なかった」という仮説はほぼ立証されたと言える。